

要約

過去の比較文化研究は、幸福感の規定因に文化差があることを見いだしてきた。本研究の目的は、この差異の原因は、人々が住む社会の関係流動性—当該社会に存在する対人関係の選択肢の量—の違いにあるとの仮説を検証することである。北米のような高関係流動性社会は対人関係の組み替えが比較的自由であるため、個々人の全般的な社会的価値によって社会的成功が左右されやすい。よって、自己の社会的価値の主観的指標である自尊心が幸福感と強く相関する。一方、東アジアのような低関係流動性社会では、対人関係が比較的継続的であるため、個人の社会的成功はその人が既に持っている個別の対人関係の質に左右されやすい。よって、幸福感は、既存の対人関係の質によって決定される。以上の仮説を検証するため、大学入学直後の新入生を対象に準実験を行った。入学時に引越を経験した者 168 名と、引越を経験しない地元出身者 172 名を比較した。その結果、既存の対人関係の良好性が幸福感に与える影響は、予測通り、相対的に低関係流動性状況に置かれている地元出身者でより強く見られた。一方、自尊心の効果については、予測とは異なり、引越経験者と地元出身者の間に統計的有意差は見られなかった。以上を踏まえ、人間の心理過程に対する社会環境の影響を重視する社会生態学的アプローチの意義について議論する。